口語詩句投稿サイト72ｈ

ことばの力詩集

2026年10月　第72号

口語詩句投稿サイト72h



ことばの力詩集

2026年10月　第72号

選者

暮田真名（川柳人） 3
小島なお（歌人） 11
杉本真維子（詩人） 17
高橋修宏（俳人・詩人） 26
立花　開（歌人） 32
西躰かずよし（俳人） 41
林　桂（俳人） 49
龍　秀美（詩人） 60

暮田真名　選

立田渓（兵庫県）

しないから動詞ではない戦争は

「戦争」と言うときのゴロンとして動かない塊のかんじ、これは動詞ではないからなのか、と気付かされる。戦争が日常に入り込んだときには、「逃げる」や、「殺す」など、具体的な動詞として現れるだろう。

ダルム（福岡県）

かつ丼　でけた
とろりと　でけた
ころもが　ずるり
とろけて　でけた

「できた」ではなく「でけた」であるところがポイントだ。「かつ丼　できた」では、語感がサキサキして、かつ丼ではなくトンカツだ。卵のからまったとろとろ感を出すためには、やはり「でけた」である。

太朗千尋（東京都）

ボクサーになれば顔面を殴られる
怖いぜ
ひとりで生きてゆくのは

ボクサーになって拳を受け止めるという限定的な恐怖から、人間は皆一人であるという普遍的な恐怖へと、シームレスに移行している。ボクサーの恐怖が語られることで、反対に、ボクサーではない人々の恐怖にも想像が及ぶ。

まちのあき（宮城県）

外たぶん雪国
だよって言ったのに
ピクトグラムは行ってしまった

わたしたちにもっとも馴染み深いピクトグラムは非常口の緑の人。東京オリンピックの開会式のパフォーマンスも懐かしい。街を白く染め上げる雪とピクトグラムは、「匿名性」という共通点で響き合う。その上、外へ出ていくイメージもある。

貴田雄介（熊本県）

銅像にされて校長立たされる

中原紘（山口県）

権力を持ち、功績を称えられて銅像になった校長を、叱られて「廊下に立っていなさい」と命じられた子供に見立てる諧謔味。しかし、当代の校長が銅像になるケースは稀だろうから、魔女のようなものに銅像に変身させられてしまったのかもしれない。

毛が生えたみたいに見えた
お風呂のアヒル
埃に光があたると綺麗

埃を被っているということは、お風呂場に置かれてはいるものの、一緒にお風呂に入ることはもうなくなったアヒルだろう。毛に見えるくらいなら、かなり年季

が入っている。手入れをされていない証である埃に美しさを見出す、スタンダードな詩情。

深谷健（埼玉県）

小春日の小指に図工室の鍵

「こ」はるび、「こ」ゆび、ず「こ」うしつ、という音の積み重ねが心地よい。鍵のリングを小指にはめて、いまにも回しそうな勢いだ。いっとき訪れた暖かい日に弾む気持ちと足取りが伝わってくる。

鱈（石川県）

台風を抱いて呼吸の糧とする

気象衛星画像で見る台風は、台風の目を抱える巣のよ

うにも見える。大きな災害をもたらしうる台風が、しかし己を力づけるものでもあるという感覚は矛盾しているようで、とりわけ青春の中ならばわかるような気もするのだ。

金子（東京都）

午後六時
すべての人が逆光で
ワタシを脱いでいる
ターミナル

午後六時の駅のプラットフォームであれば、仕事を終えて疲れた人々……というイメージが浮かぶが、主に

飛行機やバスで使われる「ターミナル」であるところが、より長距離の移動を想起させ、「誰でもない人間」であるかんじを増している。

塩本抄（石川県）

どの出口からも満遍なく遠く
ぱいなつぷるのつぷるが好きだ

上句の「出口」は、建物やテーマパークのことを言っているようで、象徴的な意味も帯びているような気がする。もし人生のような長い道のりであれば、「つぷる」のような小さな楽しみを集めるのも良いだろう。

小島なお　選

赤城条治（埼玉県）

既知の海あたりで既発表となる

未知と既知。未発表と既発表。いちどでも誰かの目に触れればそれは瞬時に切り替わり二度と戻らない。未知が既知になるオセロのような退屈がまた。

こはくいろ（大阪府）

わたしがふりむいたところ
からじゃない
たぶん、
再生して

動画をコマ送りにしてある場面を探している様子。「わたし」は何に振り向いたのか。目線の捉えた先の存在によって過去から規定される現在が見えてくる。

古橋紗弓（愛知県）

ペイズリー柄の脳みそ四面楚歌

蔦や枝を伸ばす植物や種子の模様のペイズリー。危機

的状況に追い込まれたときの脳みそはヒトの理屈を捨てて、植物の生存本能に切り替わるのだろうか。

森川紬（福井県）

ホチョウキ届きましたか
音楽を決定しているのは耳の
窪みだろうね　夏の蝶

補聴器が耳の窪みにうまく嵌ればよく聴こえるけれど、フィットさせるのは難しい。音楽との相性もそんな偶然に託されている。無音の旋律を思わせる夏蝶。

Kamome（京都府）

青蚊帳の舐めても味のしない肌

蚊帳に囲われた青い夜の空間。そこは別の世の胎内のようでもある。ほのじろく闇に浮かびあがる肌を舐め、この世の身体を確かめているようでもある。

稲井亮太（奈良県）

少しずつ理解するからシンプルにテプラで埋めたタトゥーのように

識別のためのラベルを身体に彫り込むことができたら。幾種類もの文字や記号によって注意喚起などの情報を視認してもらうことができたらどんなに楽か。

雪原あおい（埼玉県）

迷路では右手を壁につけてゆくあなたを忘れるときもそうする

見通しの悪いなかでもそこに壁があること、壁のつづく先には出口があることを信じて。あなたを忘れるための道程もきっと壁づたいに慎重に私は進む。

樋口九亥（東京都）

みそ汁のしずかな砂漠の夜

みそ汁の面には砂紋を描くようにみそが渦を巻いている。食卓の上のお椀のなかの小さな砂漠。私はその砂漠の夜ごと吸い込むようにして身体を温める。

小川未夜子（石川県）

彫り物にされるか
胎児に戻るか、か

彫り物とは墓のことだろうか。この世に産まれればみな等しく死へと近づく日々がはじまる。その流れに抵抗するためには未生の地点へ戻るしか道はない。

小西電波（北海道）

終戦の日と言われても踊っている

童話の赤い靴を思い出す。いちど踊り出した運動体は意識の箍を外れてとどまることはできない。それがたとえ終戦の日でも、心底の罪を自覚するまでは。

杉本真維子　選

桜庭紀子（和歌山県）

田園を雨浴びながら駆けぬける
夏の子どもはみじかい神話

「みじかい」というごくありふれた形容詞が輝いている。それは神話そのものの短さと、子どもの身体の小ささを引き受けつつ、ふたつを架け橋する。

みなはぁと（東京都）

どちらかが
何かを言えば
走り出す
光放つ再会のドミノ

物事が起こる一瞬前をつかみとり、それをスローモーションで見せているかのよう。感情を書かなくても、ここにあるものはよろこびである、と伝わる。はちきれそうな笑顔を待機させた、互いの束の間の無言がとてもいい。

境千尋（東京都）

人間はみんなキリンの食道で
死ぬまで長い夢をみている

とりわけ書法を好ましく思った。額縁のなかで世界を語る一枚の絵のよう。キリンという一つの枠組のなかで、人間とは何か、が検証されているのだろう。

丸ヶ崎結子（北海道）

ほろ酔いで街を歩けばずいぶんと
わたしの部屋の膜がのびてく

酔いによって弛緩した公私の境界線が、「私」の領域を拡大させていく。お酒のシッパイといわれるものは

たいていこれに起因するのだろう。「ほろ酔い」気分に水を差すような野暮な評だが、このあと無事に帰宅できただろうか、と、つい心配してしまうくらいリアルな作品だ。

不在標本（三重県）

今年も会えぬまま
仏壇の水だけ
減っていた

痕跡として「仏壇の水」。それは、目に見えるものだけがすべてではない、という当たり前のことを受け入れられるかどうか、天から試されているようでもある。

白馬（静岡県）

猫の影から香り立つ
神様だったときの石鹸

「猫」ではなく「猫の影から」と書かれているように、ここにある「香り」はほんの微かなものだろう。だからこそ信じられる。「神様だったときの石鹸」とは言い得て妙というもの。猫がもつあの語りがたい気高さに、見事な名を与えている。

ツキミサキ（大阪府）

落ちる場所さがしているのか雷が
ドラムロールを鳴らして近づく

「雷が」まで取り込んだ一行目が効いている。だからこそ二行目の「ドラムロール」が読者の耳に届く。たしかに近づいてくる感じがある。その成果を確認するために改行の異なるものをここに置いてみることにする。――「落ちる場所さがしているのか／雷がドラムロールを鳴らして近づく」。もしもこうだったら、とたんに力が弱まって、全然違う作品になるだろう。

びりこ（千葉県）

雨の音閉じ切っていない子の瞼

子の瞼が何か別の扉となっている気配がある。子からそっと始まる、親たちの旅の時間について思うこととなった。

境千尋（東京都）

終電は光の匂い
たったいまみんなが
手放してきたものたちの

「みんな」とは「わたし」の知らない世界を携えてそこにいる者たちなのかもしれない。そのことを生々しく感じさせる終電という場所に焦点をあて、「光の匂い」をつかみとったのは一つの成果だろう。

髙田皓輔（千葉県）

わたしたちそれぞれ
母語で黙りあう
ニホントカゲの幼体を虹

「幼体を虹」といわれて、ぐうの音も出ない。まさに作者と読者が「黙りあう」状態であり、先に予言されていたとおりになっている。鮮やか！

奥野史也（京都府）

塩梅が分からないなと外に出てみんなわかってない服でした

「服」が負っている意味のようなものが興味深い。これを言語化したら、どこまでも過激になりそうではある。そこで少し抑制をかけて、批判でも同調でもないところで選ばれたものが「服」だろうか。ユーモアというたたかい方に転調させたところがいいと思う。

今回も優れた作品が多く寄せられました。次回もお待ちしています！

高橋修宏　選

常田瑛子（山口県）

失われた森の跡を追うように
透明な鳥が木々を揺らす

森は失われても、その痕跡、そして記憶は、いつまでも残りつづける。「透明な鳥」とは、そんな森の記憶を揺らしつづける使者と呼べるものなのだろう。

猪山鉱一（神奈川県）

渋滞に巻き込まれてる千鳥柄

「千鳥柄」という、ひとつのデザイン（意匠）自体が、あたかも生きた主体のように前景化し振舞っている一句。それは、洋服などの柄なのかもしれないが…。

こはくいろ（大阪府）

わたしがふりむいたところ
からじゃない
たぶん、
再生して

ふだんの何気ない会話の一瞬を、切り取ったような作品。そこで、「再生」される過ぎ去った時間と、現在の会話の時間が、入れ子のように現前する。

戸倉田面木（東京都）

抜け殻になれない夜の蝉時雨

「抜け殻」という言葉からは、直ちに蝉の羽化のイメージを連想する。しかし、それに対し「なれない」と否定形が介在することで、「夜の蝉時雨」に不可逆な時間性が刻印される。

神澤保仁（神奈川県）

よく眠りよく開いている冷蔵庫

観察する眼差しが効いた一句。だが、それは写生的なものなどではなく、擬人化する眼差しだ。「よく眠り」と「よく開いて」というチグハグさが、一句に不思議な印象をもたらす。

市川いかる（兵庫県）

お互いを日時計とする間柄

「日時計」と言えば、その影の長さや傾きによって時刻を知るもの。「お互いを日時計とする」とは、単なる相互依存を越えた、どこかのっぴきならない関係であるのかもしれない。

るびぃ（滋賀県）

僕らは濁水のなか
藻掻いて足掻いて
フェイクを掴みにいくの

その否定的な措辞の連なりから、現在のＳＮＳなどに

惑わされるアイロニカルな「僕ら」の自画像として受け取った。まさにポスト・トゥルースの世界とは、そのような振舞いが溢れているのだろう。

蒋草馬（東京都）

奥に沈んで、祭の、聞こえない森

この一句では、風景画のような遠近法は、あらかじめ毀れている。だが、その「森」は一人ひとりの中に潜在する、名づけがたい「森」であり、ふいに「祭」が始まるのかもしれない。

石村まい（兵庫県）

空耳の空をさまよう飛行機に
あふれさせたい晩年の貝

その「空」は、不在の空でありながら、アクロバティックな修辞により、ある実在感をもたらしている。「飛行機」も「貝」も、その映像＝イメージ自体の中で愉しむことができればいいのだろうか。

中原紘（山口県）

毛が生えたみたいに見えた
お風呂のアヒル
埃に光があたると綺麗

その微細とも呼べる眼差しが光る一句。「お風呂のアヒル」をめぐって、光があたった「埃」が「毛」に変換するという把握が、幻惑的でもあり、どこかチャーミングと感じた。

立花開選

塩見佯（沖縄県）

黄桃を姉のかわりに撫でまわす

姉が桃を撫でたいのか、主体が姉を撫でたいのか。ひらがなで表記された「かわり」には様々な含みが生まれる。読み手はそこから後者を想像する。そして「撫でまわす」掌や感情の湿り気に不穏さを抱く。不穏の種を散りばめ、読み手に勝手に芽吹かせる面白さ。

互井宇宙論（埼玉県）

プラネタリウムで微笑みながら
眠るのがほんとうの屈葬だから
してみて

プラネタリウム鑑賞後、私たちはもちろん生きたまま施設をあとにする。まさかそこで埋葬されるとは思わない。ここで指す「ほんとうの屈葬」の対象は身体ではないのだろう。心や記憶がプラネタリウムで葬られる。遺された身体の行方を思う。

茅野文（東京都）

吾輩はネコである
処女はもう無い

有名な一節からの飛躍。処女か非処女であるかを明言するのは憚られることだが、しっかりと言い切ることが潔さと一層の生々しさを引き寄せる。自分の身に起きたことをただの記号や他人事としてしか捉えない意識の乾燥が肉体の生な感じと鋭いコントラストとなっている。

茶和鈴（東京都）

新しい毎日を覚える母
昨夜の私も忘れてる
空気が荒れ　それも有れ　今在れ

この作品の素晴らしい箇所は、「覚える」ことから始まっているところだ。認知症は、物事を忘れできなく

なっていくもの。荒れてもいい、生きているのだから、新しく覚えなおすことができる。「今在れ」には主体の切実な想いが込められる。

快名（千葉県）

鳥影に
遠くあなたを見上げれば
その飛び方で燕と解る

どんなに遠くてもあなたのことはわかる。なぜならずっと愛して見てきたから。鳥影を見上げる眼差しの先にあなたがいる。今は傍にはいないのかもしれない。姿がどんなに変わっても分かる。今は燕。

なかむらそう（長野県）

もやもやも
さらしあいたい眼にスプーン
メロン）メロン）おそろしい皿

文字と記号で像を完成させる面白さ。「メロン）」はスプーンですくわれた果肉でもあるし、メロンを眺め、まばたきをしている眼でもあるように見える。乾燥しがちな記号表記での表現に含みを持たせ、読者を遊ばせてくれる。

山地亮介（大阪府）

給与明細を拡大する
指の間で
生活だけ小さくなる

スマホ等の画面の拡大は指二本で行う。その指の間の世界。文字をよく見るために拡大したのに、現実が迫り生活の過酷さが浮き彫りになる。見たかったもののためにした行動で、見たくなかったものが顔を出す。

川原尚悟（神奈川県）

私は地獄に落ちる
あなたが下を向いた時
話を聞いてやるために

滝春子（京都府）

愛とは究極のエゴだ。相手を救いも苦しめもする。主体の愛は強く、しかし完全な自己完結だ。「あなた」は下を向かないかもしれないし、「私」の存在に気が付かないかもしれない。それでも、あなたのために喜んで地獄へ行く。救いになるか苦しみになるか、わからなくても。

ほんとのことだけ話してって
崩れながら胸の岸辺に
近づいてゆく

知ることは傷つくことでもある。それでも知りたい。「ほんとのこと」を話してほしい。知る前から崩れて

いるのは、主体の欲しい真実ではないことは分かっているのだろう。今のままが耐えられないから進むしかない、二択の地獄。

雪原あおい（埼玉県）

花火見て
「きれい」と言える
この星の火薬はぜんぶ
花にもなれる

戦争で使われている火薬は人を傷つけ、花火に使われている火薬は人の心を動かす。直接詠い込まなくとも、

時事詠としても力がある。上・下句で二文に分かれているのはやや気になるが、結句「花にも」から散った火薬や命への弔いの心が滲む。来世は花に。

西躰かずよし　選

赤石涼（徳島県）

まんまるで
ほめられるのは
つきといぬ

まんまるのままで褒められるものが挙げられる。そして、そのままでは褒められないものがあることを思い出す。褒められるものが月と犬であるとき、そのままでは生きられないもののことを思い出す。ただ褒められようとして、大切なものを置き忘れてきたあとに月と犬だけがのこる。

蒋草馬（東京都）

夏の川パン食べてやっぱり泣く

食べるという行為はとても原初的なものだろう。そして泣くという行為も。生まれた時には、誰もが大声で泣いたに違いない。食べる。泣く。それらを「やっぱり」ということばが、追いかける。

電子（宮城県）

透明な傘へ春が泊まる

作品は、俳句の定型より短い。自由律の短律になるけれど、そうした方法を用いた放哉や山頭火らの作品は、彼らの境涯と無関係には存在しない。けれどもここでは、そうした手法は採られない。俳句の写生の方法を、

そのまま短律という形式に持ち込もうとしているかのように見える。口語によるいい切りが効果的。透明な傘へとやってきたみずみずしい春の呼吸が目の前に広がる。

常田瑛子（山口県）

公園の金魚の墓を掘り返し
夏の終着点を探した

墓を掘り返すという行為は許されるものではないけれど、それ以外に喪失を表す方法がないのなら、誰もそれを責めることはできないと思う。金魚の死を通して語られる、いのちの終わり。「夏の終着点を探した」という一節に、喪失の痛みと季節の悼みが重なる。

奥井健太（滋賀県）

シャワー浴び終えても
海がそこにある

飛和（長野県）

傾いたシーソーが静かに光る
公園に少女の私たち

シャワーと海と、それらは同じ水という属性を持ちながら、一方は終焉を、もう一方は継続を表す。海は、語り手のなかの侵されざる領域なのかもしれない。同じ作者の作品に、「連休の初日は雨のヒヤシンス」というのがある。いずれの作品でも、「もの」と「作者の心象」が重なる。そこには、切り取られた時間の永続性（無時間性）がある。

滝春子（京都府）

浜茄子の明るい夕べ
家族にはなれないひとを
駅で迎えた

「家族にはなれないひと」という一節。もしそこが「家族

「公園に少女の私たち」という一節から、語り手の「少女の私たち」自身へと向けられる、まなざしまでの距離が想起される。遠くの自身を語るということは、そこが、いま住んでいるところとは別の場所にあるということを表すのだろう。その公園は、きっと語り手の記憶の中にしかない。それは、幼かった頃の、時に残酷で美しかった時のことだろうか。

にもなれない」であるなら相聞歌とも読めるけれども、そうは書かれない。「家族にはなれないひと」は、「自身の人生と交わらないひと」と言い換えられるかもしれない。その仮定によって、日々の営みにおける人との交錯が、決して自身の人生に届くことはない人との関係を映すものへと変わる。浜茄子の夕べの孤独がまぶしい。

盛武虹色（京都府）

天使一斉にはばたきそうな夕焼け

世界のすべてが夕焼けに染まったときのことを詠ったものだろうか。語り手もまたその情景のなかにいる。世界との境界を消そうとするかのような夕焼けが、天使の羽ばたきになる。同じ作者の作品に「海のない町の水槽

晩夏光」というのがある。夕焼けから天使へのイメージの飛躍と同様、海から水槽へとイメージがつながる。その見方から語り手のまなざしの深さが感じられる。

桜庭紀子（和歌山県）

田園を雨浴びながら駆けぬける
夏の子どもはみじかい神話

子どもを神話ととらえるまなざしに宿るやさしさ。けれど、その比喩で脱色されるものがある。声のないものに対するやさしさと、しずけさ。神話へと置き換えられる比喩のあいだから、わずかに子らの息遣いが聞こえる。

大西美優（広島県）

Ｎｏｎと言っても
いいよ、きりすと
星月夜

Ｎｏｎと言うのは思ったよりも難しい。Ｏｕｉがあたりまえの世界では。作中のキリストや星月夜は、既に許されたものとして例示されていて、まるで童話の世界の住人のようにも見える。それでもキリストが殺害されたという事実は変わらない。やわらかな語り口のなかに、世界を敵にしても、Ｎｏｎを言うものの味方でありたいという、まっすぐな意志が感じられる。

林桂 選

回る卵（宮城県）

夜のキッチン
桃のかたちに
月光は降る

この「桃のかたち」はなんなのだろう。夜のキッチンの窓からのぞむ月光。作者のどのような思いと重なっているのか。幸福感はあるか。

境千尋（東京都）

五年もつ電球買えば
五年後のひかりのもとに
私はひとり

蛍光灯の寿命は、ほぼ5年くらいらしい。ＬＥＤは15年くらいは持つと教えられる。しかし、短い寿命の５年であっても、どのような自分生活を照らしてるのかは予知しがたい。遙かな感じがする。しかし、作者は相当な確信をもって、ひとりの孤独な生活を思い描けるというのである。もちろん、それは現在の照り返しだろうけれど。

佳乃子（東京都）

産んだ覚えはないけれど
しっかりこの子は私の子
毛深くてヒゲ生えてるけど

愛猫家の心理を書けばこうなるだろう。何時までも子どもでいてくれて、甘えてくれる。人間の子どもにはできない。猫は、人間と自分を区別しないで、大きな猫と生活していると認識しているのだという研究成果があると最近知った。猫からも間違いなく母に見えている。

鶴賀椰子人（山口県）

枝豆をつまもうとして黙られる

「黙られる」。会話の間。「枝豆をつまもうとして」自体が、会話の中断を求めての行動だろう。それに「黙られる」は、応じたものとも言える。枝豆をつまみ合う近しい関係の、しかし重い内容の気まずい会話なのだろう。

チッチ（東京都）

桃のうら腐りどろどろだますかす

反射的に思い浮かぶのは、地球儀を持ってのゴー☆ジャスのネタだが、「桃のうら腐りどろどろ」では、お笑いにならないだろう。むしろ、言葉の意味を削ごうとした加藤郁乎の俳句「昼顔の見えるひるすぎぽるとがる」の影響を考えるべきかもしれない。「桃のう

ら腐りどろどろ」に最も傷みやすい果物の一つである桃のありようが描かれている。それでいて「だますかす」。音の連鎖だろう。

夏の川パン食べてやっぱり泣く

蒋草馬（東京都）

「やっぱり泣く」は切ない。一人になりたい事情があっての夏の川辺だろう。昼食を軽食のパンで摂ろうとしているのか。しかし、一人になれた安心感で「やっぱり泣く」。

夏の旅おにのパンツを歌う子ども

金光舞（埼玉県）

「おにのパンツ」は、ナポリ民謡「フニクラ・フニクラ」の替え歌で、ＮＨＫの子ども番組でよく耳にした。鬼の虎皮のパンツは丈夫だという単純明快な歌詞だが、「つよいぞーつよいぞー」の歌詞が耳に残る。歌うと元気がでそうだし、自分自身を励ます言葉にもなる感じだ。旅の興奮が、子どもに「おにのパンツ」を歌わせているのかもしれない。あるいは、旅の見馴れない環境の不安に立ち向かうべく自身を励ましているのかもしれない。

雪原あおい（埼玉県）

抱きしめる前のかたちに手を広げ
平均台の上を歩いた

これは寺山修司の短歌の本歌取りではないかと瞬間に思った。「海を知らぬ少女の前に麦藁帽のわれは両手をひろげていたり」。「ひろげていたり」には、さまざまな解釈があるだろうが、少年の少女に対する半分意地悪な通せんぼであり、半分少女を抱き止めようとする姿であると、私は解釈している。「抱きしめる前のかたちに手を広げ」に、私の寺山の短歌の解釈が反応してしまったのだが、「平均台の上を歩いた」にまで転じて、新たな世界が開けている。本歌取りとは、このようなものだったのだろうと、その見事さにひとり感嘆している。ちなみに平均台は、体操の女子種目に使われる。寺山への、少女からのアンサーソングに見えなくもない。

田仲トオル（埼玉県）

誰にでも言えないことは
あるもので、ドレッシングが
ちょっとすっぱい

「誰にでも言えないこと」というと、深刻な悩みとなりそうだが、ここでは違う。ちょっとした違和感。言うほどでもない些細なこと。しかし、私たちは、敢えて言わない小さな違和感を持ちながら生活している。

髙田皓輔（千葉県）

わたしたちそれぞれ
母語で黙りあう
ニホントカゲの幼体を虹

ニホントカゲの成体は、渋い灰色だが、幼体は尾にかけて瑠璃色に輝いている。幼体の方が目立つのは、危険なようだが、調べると目立つ尾を囮にするためだろうという。トカゲは尾を自切して、敵の目を尾に向けて逃げるという奥の手がある。目立つ尾は、敵の目を惹くより効果的な方法なのだろう。私たちの思考の言語が母語である。通じ合う異言語で話し合いながら、その沈黙の間は、それぞれの母語で思考している。その断絶を深いととるか、しばしのこととととるか。取り合わせた「ニホントカゲの幼体を虹」も、この華やかで、やがて消える色彩の「虹」をどう受け取るか。「幼体を」の「を」は、「虹」のあとの用言が省略されていることを示唆する。「虹が渡る」か「虹が走る」か。

この言い止し表現も深い思考を誘う。

池野飛魚（鹿児島県）

最近は自炊してるよ
お母さん、僕は初めて人を殴った

一筆啓上賞の母への手紙の趣きである。しかし、その趣旨が母への感謝や安穏な生活を伝える一色に傾いてゆくのに対して、この詩は一色に収束しない。親元を離れて自立した生活を送っているようすを伝える「最近は自炊してるよ」。母は安心するだろう。しかし、「お母さん、僕は初めて人を殴った」は、日常に何らかのトラブルを抱えながら生きていることを伝える。母は不安になるだろう。しかし、思えば、子どもの手紙は、

母の安心や不安を考えずに、ストレートに書いてしまうことだってあるに違いない。究極の甘えなのかもしれない。母はそれを受け止めるしかない。

龍　秀美　選

ムクロジ（群馬県）

薬袋の上が折られて扇風機

余った薬の袋の端をちょっと折っておく。扇風機が素知らぬ顔で首を振る。何気ない、なにも無い情景だが、この二つが取り合わされると、「何気なさ」が印象的に迫ってくる不思議。

藤枝優太（神奈川県）

生活は
あとがきばかり
背表紙は
犬と光へ走りゆく君

生活という「本」の中身は、ひとつひとつの出来事を片付けながら、「あとがき」のように淡々とページの中にしまわれていく。その光景の中で躍動しているのは、愛犬と愛する君の存在だ。

段原律（北海道）

チューペット分ける時だけ
兄妹の顔して笑う
君が恋しい

子どもに人気の棒アイス。ポキンと二つに割って一緒に食べる。そのとき（だけ）、全く無心の表情になる君。深い安心感が伝わってくる。

曽我門出（新潟県）

マイナンバーカードありますか
あります
でも今日は桃を持ってきました

「身分証」という、他に説明が要らないほど、それ以外ではないもの。ちょっとつまらないので、今日は、それ以外の「桃」を持ってきました。

山田やまめ（千葉県）

蜂蜜は予言のようにまっすぐと、そうしておろかなヨーグルトへと

重力という自然に逆らうことなく、まっすぐ降りてくる蜂蜜。「乳と蜂蜜の地」の預言者の言葉のように。そしてそれは、さまざまに人為を加えられた「おろかな」ヨーグルトの上に。

彩里（神奈川県）

目を開けた時、
初めて見えたなんて理由で
愛するのには、充分なんだよ

動物の新生児は初めて見たものを親だと思い込むそうだ。愛や恋も同じようなものかも。

白飯零（大阪府）

ロッカーに友置くメロス資本主義
その百円で潤おわす喉

「メロス資本主義」という造語が面白い。善意の百円か、気まぐれの慈善か。近年の思いつきの施策のよう

な気もする。

仮野（栃木県）

戦争の具体性
平和の抽象性

戦争が私たちに見せてくれる悲惨な情景や、地域や民族性による事の成り行きの鮮明さにくらべ、平和は人が理性で描きだす抽象的な理論だ。それゆえ説得力に乏しい。地獄篇が天国篇より面白いように。私たちは今、どうすれば平和を得られるのだろうか。

Kamome（京都府）

青蚊帳の舐めても味のしない肌

青蚊帳という、かつて有った風景のまぼろし。夜風にさやぐ音や、麻の匂いの記憶。しかし、まぼろしに味はしないのだ。

蒋草馬（東京都）

夏の川パン食べてやっぱり泣く

水のあるところは人を落ち着かせるという。川辺に行って流れる水を見て、パンなんか食べて。それでもやっぱり泣かずにはいられない。その心の経緯が自然に分かって、読むほうまで泣きたくなる。

びりこ（千葉県）

雨の音閉じ切っていない子の瞼

深い睡眠に入った子どもは薄目を開けて眠るという。雨の密やかな音に、眠る子の瞼が閉じていないのに気付く。ふっと自分も不安になる瞬間がよく捉えられている。

栂沼八潮（静岡県）

そんなこと格好つけて言ったって
俺、入れ歯だし
（禿げてないけど）

外見で心持や物言いさえ変わってしまう人間の面白さ。かろうじて気を持ち直す「禿げてない」こと。

おもち月（石川県）

鳥が好き
見るのも飼うのも食べるのも
どこでも行ける羽があるのも

「好き」ということには様々な理由があることに気付く。見て楽しみ、飼って喜び、果ては喰ってしまう。人間の身勝手さだろうか。人にも同じことをしているのだろうか。

いよは（京都府）

葛入りの水羊羹みたい
わたしたち
蓋するみたいに
はこび運ぶ

表面張力でかろうじて零れないような危うさを保っている「わたしたち」。透明で見えない動きもある。「はこび運ぶ」という措辞が危うさを盛り上げる。

池田玲亜（滋賀県）

記憶しないから
匂いは忘れない

理性をつかさどる前頭葉では「匂い」という身体性は言葉では記憶されない。記憶されないから忘れることもないのだろう。

市川いかる（兵庫県）

革命の理由となった句読点

句読点ひとつで意味はガラリと変わる。革命を引き起こすことも有るほどに。しかし、昔の日本語には句読点は無かった。西欧文化との違いが潜んでいるのかも知れない。

口語詩句投稿サイト 72h
www.kougoshiku-toukou.com

ことばの力詩集

２０２６年 10月　第 72 号
掲載作品　2026 年 8 月投稿分

発行日　2026 年 10 月 1 日
発行　公益財団法人佐々木泰樹育英会
東京都中央区明石町 8-1　聖路加タワー 40 階
TEL.03-6278-5595　FAX.03-6278-5591

「ことばの力詩集」の命名は、榎本了壱氏によるものです
編集・デザイン＝アタマトテ・インターナショナル
AD＝榎本了壱　D＝坂口真理子
印刷・製本＝株式会社グラフィック
ISBN 978-4-910485-79-9

佐々木泰樹育英会の口語詩句事業

【第8回口語詩句賞】

賞の種類と賞金

大賞（原則1名）100万円　奨励賞（若干名）10万円

スケジュール

投　稿　期　間：2026年2月1日～2027年1月31日
選　考　期　間：2027年2月1日～3月5日
選考結果開示日：2027年3月18日
授　　賞　　式：2027年3月29日

【2027年度 口語詩句奨学金概要】

区分と給付額

中学生6万円　高校生12万円　大学生（大学院生含む）60万円

スケジュール

投　稿　期　間：2026年2月1日～2027年1月31日
選　考　期　間：2027年2月1日～3月5日
採用書類提出締切日：2027年3月12日
選考結果開示日：2027年3月19日
奨学金給付通知書授与式：2027年3月29日

※最新情報は本財団ホームページでご確認ください
https://sasakitaijuikueikai.or.jp/

後援

一般社団法人現代俳句協会
株式会社思潮社 現代詩手帖編集部

発行　公益財団法人佐々木泰樹育英会